

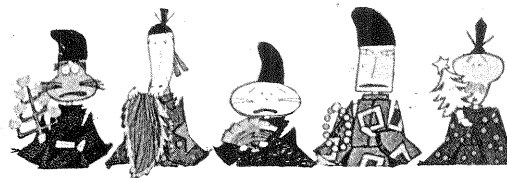
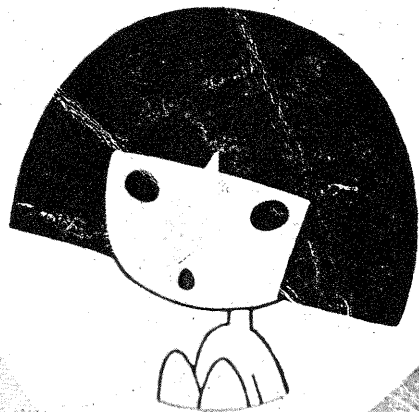
サラ文庫

かぐや姫

ひめ

厚生省児童福祉文化賞受賞

まんが日本昔ばなし 第十六話



0171-761238-7339(0)



ひめ
かぐや姫



「かぐや姫……。わしは、おまえなしで、ながいきしても、しあわせになれん……」
 かなしみにくれたおじいさんは、やがて、かぐや姫のくれた不老長寿のくすりを、火のなかにくべてしまいました。
 かぐや姫のいない、いまとなつては、もう不老長寿のくすりなど、もっていたくはなかつたのです。
 おじいさんの、おもいをたくしたほのおは、かぐや姫のいる月にむかって、たかく、たかく、のぼっていききました。

● まんが日本昔ばなし全集

- 《第一巻》 ①桃太郎 ②竜の淵 ③たにし長者 ④ちようふく山の山姥 ⑤鶴の恩がえし ⑥一休さん ⑦貧乏神と福の神 ⑧七夕さま ⑨大工と鬼六 ⑩風の神とことも
- 《第二巻》 ⑪浦島太郎 ⑫髪長姫 ⑬ねずみのすもう ⑭天福地福 ⑮かもとり権兵衛
- 《第三巻》 ⑯かぐや姫 ⑰古屋のもり ⑱三枚のお札 ⑲たのきゆう ⑳夢を買う
- 《第四巻》 ㉑金太郎 ㉒鉢かすび姫 ㉓天狗の羽うち ㉔定六とシロ ㉕きき耳ずきん
- 《第五巻》
- 《第六巻》 ⑳証城寺の狸ばやし ㉑耳なし坊 ㉒初夢長者 ㉓乞食のくれた手拭
- 《第七巻》 ㉔花咲かじいさん ㉕小太郎と母竜 ㉖猿地蔵 ㉗力太郎 ㉘雷さまと桑の木
- 《第八巻》 ㉙ぶんぶく茶釜 ㉚養老の滝 ㉛塩ふきうす ㉜しつぽの釣り ㉝豆つぶころころ
- 《第九巻》 ㉞一寸法師 ㉟八つ化けずきん ㊱キジも鳴かずば ㊲かしき長者 ㊳笠地蔵
- 《第十巻》 ㊴平若丸 ㊵熊ときつね ㊶湖の怪魚 ㊷たぬきと彦市
- 《第十一巻》 ㊸こぶとり爺さん ㊹赤ん坊になつたお婆さん ㊺雪女 ㊻山と山は ㊼天獄のあばれもの
- 《第十二巻》 ㊽かちかち山 ㊾イワナの怪 ㊿天沼地の黒竜 ㊽〇天狗のかくれみの
- 《第十三巻》 ㊽〇舌切り雀 ㊽〇猫檀家 ㊽〇みそ買い橋 ㊽〇羅生門の鬼 ㊽〇はなたれ小僧さま
- 《第十四巻》 ㊽〇さるかに合戦 ㊽〇たこ八長者 ㊽〇大歳の火 ㊽〇十二支のはじまり
- 《第十五巻》 ㊽〇八郎潟のはじまり ㊽〇おっかまの娘 ㊽〇旅人馬 ㊽〇にせ木尊 ㊽〇宝の下駄
- 《第十六巻》 ㊽〇あとかくしの雪 ㊽〇ねずみ経 ㊽〇山伏石 ㊽〇木仏長者 ㊽〇そこつ相兵衛
- 《第十七巻》 ㊽〇船ゆうれい ㊽〇あずきとき ㊽〇子育てゆうれい ㊽〇ゆうれいの酒もり
- 《第十八巻》 ㊽〇わらしべ長者 ㊽〇水の種 ㊽〇へび女房 ㊽〇猿神たいじ ㊽〇人参とごぼうと大根
- 《第十九巻》 ㊽〇田植え地蔵 ㊽〇うぐいす長者 ㊽〇かみそり狐 ㊽〇かつ神と黒神 ㊽〇かつたのくれた妙薬
- 《第二十巻》 ㊽〇馬方とたぬき ㊽〇百合若大臣 ㊽〇座敷わらし ㊽〇きつね女房 ㊽〇仁王とどっこい

まんが日本昔ばなし

かぐや姫 (第十六話) サラ文庫

© 愛プロ/グループ・タック

昭和51年7月20日 初版発行

昭和55年12月25日 25刷発行

発行・二見春房 東京都千代田区三崎町2-18-2 電話 東京03(263)0034

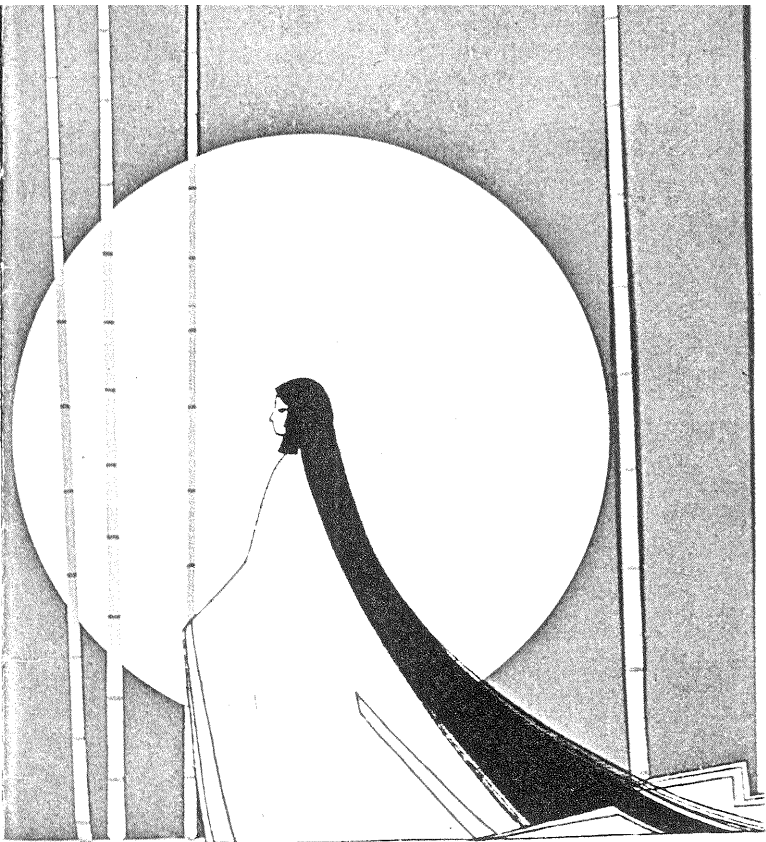
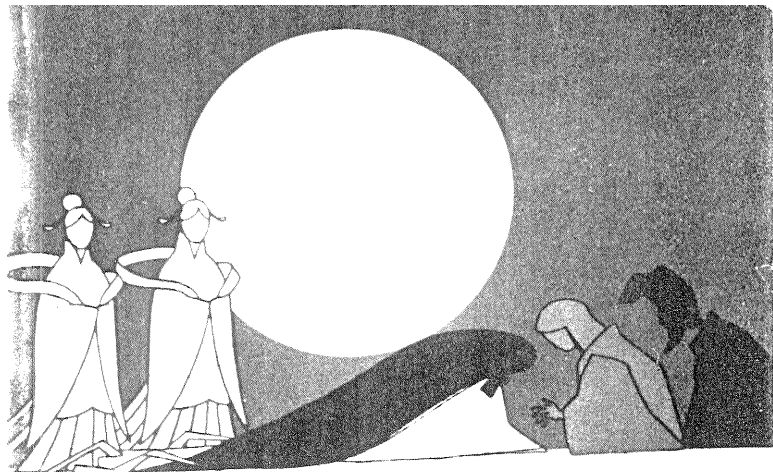
印刷/大日本印刷株式会社・装幀/森下年昭・レイアウト/グループ・パンチ

(以下続刊)

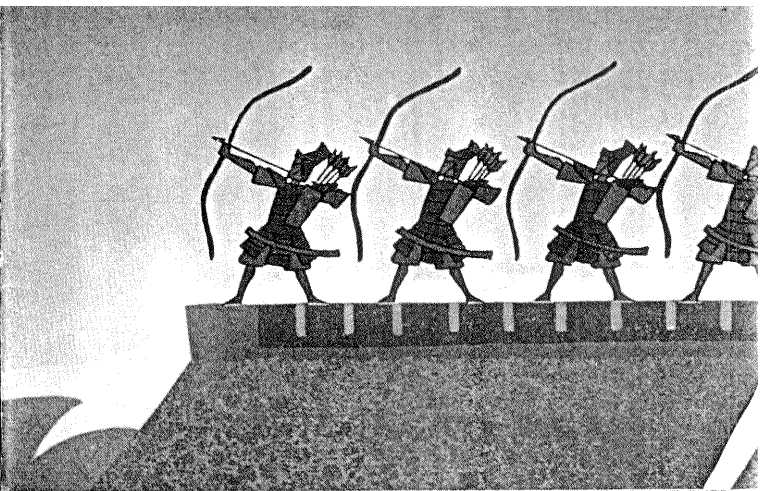
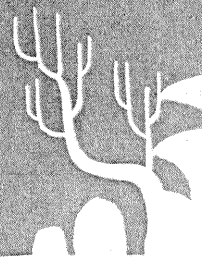
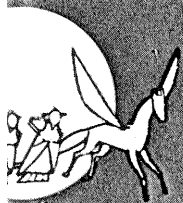


かぐや姫は、ちいさなふくろを、
さしだしました。そのなかには、い
つまでも生きつづける、不老長寿の
くすりがはいつていたのです。
こうして、かぐや姫は、とおい月
の都へと、かえっていききました。





天女と天馬は、ゆっくりと、
まいおりてきます。
すると、かぐや姫は、まるで
すいよせられるように、月の光
りのなかに、しずかに、たっ
ていきました。
おじいさんもおばあさんも、
もう、どうすることもできませ
んでした。
かなしい、わかれのときが、
やってきたのです。
「おじいさん、これを……」



かがやく月の、光りのわが、
ひろがつていきます。

さむらいたちは、いっせいに、
弓に矢をつがえて、ひきしぼり
ました。

ところが、どうしたことでは
よう。月の光りにつつまれると、
さむらいたちは、きゆうに力が
ぬけて、ばたばたと、たおれて
しまったのです。

そして、月のなかから、天女
と天馬があらわれました。



「なに、十五夜じゅうごや。それなら、あしたのばんではないか」
おじいさんは、たいそう、おどろきました。が、
「なんの、そなたは、わしらのむすめじゃ。だれにもわたす
ものか」

そして、いよいよ十五夜じゅうごやのばん。

おじいさんは、あらんかぎりの手をつくして、かぐや姫かぐやひめをつ
れもどしにやってくる月のつかいを、おいかえそうとしまし
た。おおぜいのさむらいを、まもりにつけたのです。

そして、おばあさんとふたりで、かぐや姫かぐやひめを、おくのへや
にかくまいました。

やがてひがしの空に、十五夜じゅうごやの、まるい月つきがでました。



「はい、八月の十五夜のばんに……」
かくや姫は、そういつて、うつむくのでした。





「ひめ 姫や、なぜ月つきをみて、そんなにななしむのじゃ」

かぐや姫ひめの、かなしそうなように、おじいさんもおばあさんも、たいそうこころをいためて、そのわけをたずねました。

「ああ、いつまでも、いつまでも、わたしはおふたりのそばにいたい。でも、わたしは……月つきへ、かえらなければなりません、わたしは、月の都みやこのものなのです」

かぐや姫ひめは、きえいりそうな声こゑで、いうのでした。

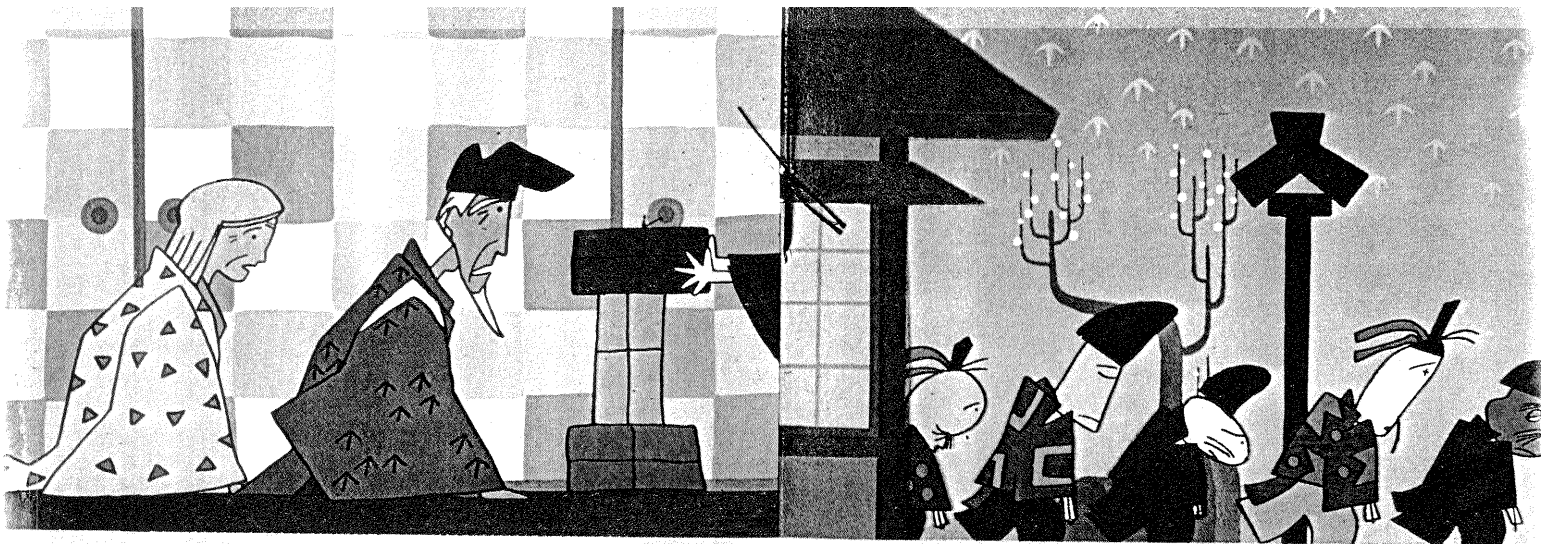
「なんと、月の都みやこじゃと？」

「はい。月の都みやこにすむものは、おとなになつたら、かならず、もどらなければなりません」

「それは、いつじゃ？」

さて、月の光りが、そのかがやきをまじ
て、十五夜がらかついてきました。
するとなぜか、かぐや姫は、だんだんげん
きが、なくなってきたのです。





これできつと、あきらめるだ
ろうと、おじいさんはかんがえ
たのです。

ところが、どうでしょう。

おとこたちは、みんな、ちゅ
うものしなを、もってきたで
はありませんか。

どれも、これも、この世のもの
のおもえないほど、うつく
しくて、りっぱなことからものば
かりです。

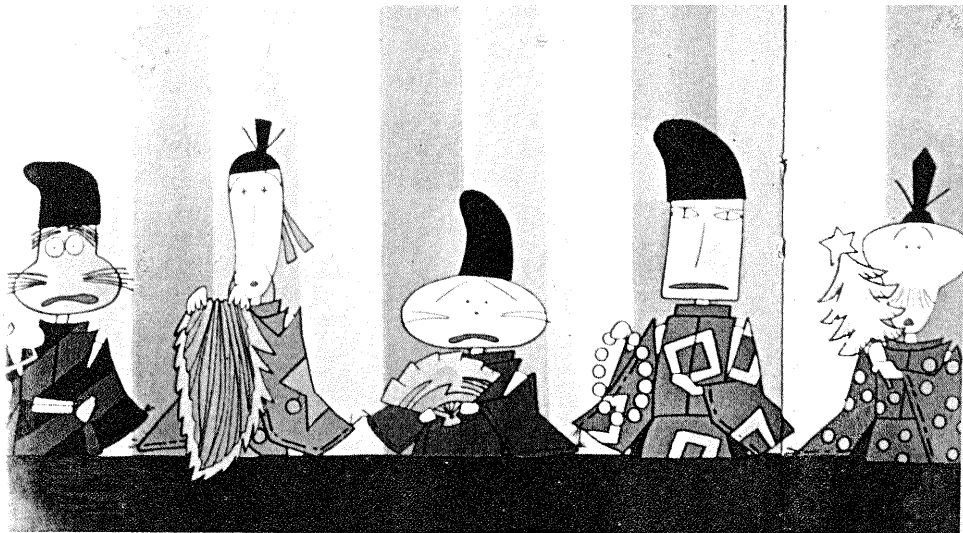
|||

おじいさんは、すっかり、こ
まりはててしまいました。

ところが、かぐや姫ひめの、光りひかり
かがやく、ほんもののうつくし
さのまえでは、みせかけのう
くしさなど、すぐにそのうそが、
ばれてしまうのです。

たからものは、みんな、にせ
ものだったのです。

おとこたちは、すごすごと、
かえっていきました。



こまったおじいさんは、
 「なんとかして、うまくことわ
 るほうほうは、ないものか」
 と、かんがえました。
 そして……
 「うん、これだ！」
 おもいついたのは、むずかし
 いちゅうもんを、だすことでし
 た。
 「それでは、あなたは、光りひかりの
 みえのなる金のえだを、もってき
 てください」



「あなたは、金きんの毛けがわ」
 「あなたは、光ひかりりを、はなつ、
 おうぎ」
 「あなたは、りゅうの目めだまの
 くびかざり」
 「あなたは、やみやみをてらすいろ
 がみです」
 それをもってくることができ
 たら、かぐや姫ひめを、よめにやろ
 うというのです。
 けれどもどれも、むりならゆ
 うもんでした。

そして、三月みつきとたたないうちに、かぐや姫かぐやひめは、それはそれは、うつくしいむすめになりました。
その、かがやくばかりのうつくしさに、みた人ひとは、おもわずうっとり、みとれてしまうほどでした。

そのうちに、うつくしいかぐや姫ひめのうわさは、国くにじゅうに
しれわたりました。

というわけで、たくさんのおとこたちが、まいにち、まいにち、たずねてくるのです。きぞくや、だいじんや、わかものたちが、いっばいつめかけて、門かどのまえに、ぎょうれつができるほどでした。





おかげで、竹とりしいさん
の家は、たいさうなお金もち
になりました。



おじいさんは、そのおんなの子を、家につれてかえりま
した。

「これはきつと、こどものないわしらに、神さまがさずけて
くださったんじやのう」

「おお、ほんに。かわいらしいむすめじや」

おばあさんも、おおよろこびです。

ふたりは、その子に、かぐや姫というなまえをつけて、と
てもかわいがりしました。

さて、かぐや姫をそだてるようになってから、ふしぎなこ
とにおじいさんは、いつも、金いろにかがやく竹を、みつけ
ました。切ってみると、こがねがでてくるのです。

ところが……。竹を切ったとたん、まぶしい光りがパツとさして、おじいさんは、目がくらんでしまったのです。
そして、しばらくしておじいさんが、目をあけてみますと、光りかがやく竹のなかに、かわいらしいおんなの子が、すわっておりました。



おじいさんは、山から竹をとってきては、かごやざるをつくっておりましたので、人びとは、竹とりじいさんと、よんでいました。

ある日のこと。いつものように、おじいさんが、山の竹やぶにはいつていきますと……。

どこからか、まばゆい光りが、さしてきました。

「はて、なんじやろう？」

ふしぎにおもったおじいさんは、光りのほうへ、ちかづいていきました。

すると、どうでしょう。一本の竹が、金いろにかがやいているではありませんか。おじいさんは、さっそくその竹を、切ってみることにしました。



むかし、むかし。
あるところに、竹とりの
おじいさんと、おばあさん
が、すんでいましたそうな。



へかいせつ これは、人間に福をさずけて帰っていく、天女のおはなしです。

かぐや姫は、竹のなかからうまれてきますが、月の都の者ですから、やがては天上へもどらなければなりません。わが子として育てたおじいさん、おばあさんは悲しみますが、それもしかたのないことでした。

別れのときに、かぐや姫がおいていく不老長寿の薬は、昔から、人びとが求めつづけてきたものです。それは、はるかかなたの世界にあつて、けっして得ることのできな
おもわれていまし
た。

その貴重な品を、おじいさんが、おしげもよく女にくへてしまふのは、かぐや姫との別れで、もうすべてがおわたったと思ったからでしょう。



まんが日本昔ばなし 第十六話

かぐや姫 ひめ

